

# 要 約

2016-11-16 (後期第 5 回) 修正版

## 「五 音楽作品における意味」

(pp.97-101, 便宜的段落番号 28 - 34)

01. グライスにおける「協力の原理」の視点を援用して、実際の音楽作品における意味の考察を行ってみたい。
02. 音楽作品における意味のコミュニケーションの構造が、ここまでで論じた基本的な考え方に合致するのを示したい。
03. 題材はアルバン・ベルク作曲『抒情組曲』(1925-26) の第 6 楽章、ヴァーグナー『トリスタンとイゾルデ』からの旋律引用部。
04. 渡辺がこの曲を取り上げた理由は、現実の作者の意図(ベルクによる個別的意図)が明らかになっているためである。
05. 1977 年に、英国音楽学者ジョージ・パールによって、この作品におけるベルク自身の意図が書き込まれたスコアが発見された(注 23)。
06. ベルクによると、この作品は、自身とハンナ・フックスという女性との「現世では満たされぬ愛」を描いたとのこと。
07. その個別的意図をかなえるために『トリスタン』の旋律が引用され、主旋律に沿ってボードレールの詩『悪の花』がつけられている。
08. ただし、聴き手がベルク自身の個別的意図を知っても、それがより関与度の高い解釈でなければ、聴き手はその意図を了解しないはず。
09. しかし、聴き手は『トリスタン』引用が「現世では満たされぬ愛」を意味するために用いられたことをおそらく了解するだろう。
10. 聴き手がこのように了解することは、なぜ可能か？
11. まず大事なことは、この作品にベルクの一般的意図が認められ、「協力の原理」で支えられたコミュ関係が成立していることだ。
12. そこから、聴き手は引用部が「作品という一つの有機的世界」をつくるのに最も寄与するのに機能しているはずと考えることができる。
13. 一方、本来『トリスタン』引用自体は多様な解釈が可能はずだ。例：ヴァーグナー音楽の象徴、ドイツ音楽の象徴など。
14. しかし、聴き手は多様な解釈を採用しない。なぜなら「楽曲の他の部分との有機的連関が緊密になるとはいえないからである」(p.99)
15. ここで「満たされぬ愛」と考えれば、第 6 楽章のみならず、作品全体の構図が「相互に連関を獲得」しながら明らかになる。  
例)：第 3 楽章でツェムリンスキー『抒情交響曲』が引用されていること。  
第 6 楽章最後で「奏者が一人ずつ演奏をやめて消え入るように終わってゆく部分」(p.100)があること。
16. このように、引用部が作品の有機的連関の一翼を担うと理解し、この部分の関与度が最大と判断するので、その解釈が了解可能となる。
17. このような理路によって、我々は引用部が「現世では満たされぬ愛」を〈意味している〉と言えることになる。
18. ここでの「満たされぬ愛」の意味は、グライスの〈意味の定義〉を完全に満たしている。 ※これはグライスのな〈意味〉と言える。
19. なぜなら「それが意図的であることを聴き手に了解させることによってはじめてその意図が完遂されるようなしかた」(p.100)だからだ。
20. 実際、引用部がたまたま『トリスタン』に似ているだけならば、「満たされぬ愛」を意味しているという確信はもてないはずだ。
21. 作品のコミュでは、聴き手の個別的意図の了解が、たとえ作者の意図と異なっていたとしても、それになり変わって意図の役割を果たす。
22. 通常のコミュでは、話者と聞き手の両方で意図が一致していることが確認できなければ誤解となる。誤解となれば「意味」とならない。
22. 一方作品では、上のような了解の過程を経た「意味」は、通常の発話における「意味」と同一の資格で「意味」となる。

(便宜的段落番号 34 の意識, p.101\_R11, 論が錯綜している？と思える部分の整理)

以上の論述は、音楽が表意しうる意味のうちの一部にふれたにすぎないのではないかと、との批判もありそうだ。つまり、言語でも表現可能な側面にだけふれただけであり、実際はこれだけではなく、音楽は言語にかかわらない側面の意味ももちうるのではないかと。しかしその批判は的を射ない。もとより我々は、いかなる音楽作品が、それに対していかなる排他的な意味内容もちうるかを「明らかにしてきた」わけではない。そうではなくある音楽において、いかなる場合に表意が可能となるか、その〈条件〉を「明らかにしてきた」のだ。だから音楽と音楽の表意内容を一対一に考えているのではない(※p.101の「それゆえ」の真意)。つまり、〈条件〉さえ満たされたならば、同じ音楽でも別種の意味をもつことを否定する立場ではないのだ。

2019-11-16 誤読修正

もとより我々は、音楽作品一般が、いかなる意味内容を持ちうるかを包括的に明らかにしようと  
だから、我々はもとより、先の批判を受けるべき対象ではなく、むしろ我々の真意は異なるものだ。